

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部		渡辺憲司 印		
自然・人文の別	自然	・ 人文	個人・共同の別	個人	・ 共同 名
研究課題	旧蔵本から江戸川乱歩を考える 近世資料と漢籍のコレクションを中心に				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	立教大学文学研究科 日本文学専攻 後期課程3年		丹羽みさと 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2004		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究ではまず講談社の乱歩全集（全15巻）を通読し、作品中にある近世資料に関係する事項を抜き出すことから始めた。「和本カード」という乱歩直筆の入手記録や雑誌『新青年』の乱歩の記事などとそれらを照合し、乱歩を近世資料の収集へと導くものに焦点を当てた。

幼少期には和本を揃えていた名古屋の大きな貸本屋（大野屋惣八と思われる）に通っていた乱歩は、大正14年に探偵小説家として独立し始めた頃、近世の裁判小説について記された小酒井不木の随筆に影響され、近世資料に関心を持ち始めた。また昭和に入ると岩田準一との男色文献の猟書を通じ、より広い分野での近世資料に関心を持つようになる。乱歩の近世資料の収集には周辺の人々から受けた影響が大きな意味を持っているといえるだろう。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[江戸川乱歩] [旧蔵書] [収集の背景]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

探偵小説家の江戸川乱歩が近世資料の蔵書家でもあったことはよく知られている。旧蔵書の中には『棠陰比事』や『鎌倉比事』、井原西鶴の『本朝桜陰比事』や大岡裁判を扱った『大岡政談』など多くの裁判小説がある。しかし、探偵小説家として活躍していた大正、昭和期には、探偵小説といえばアメリカやイギリスのものが主流であった。そのため乱歩も作家生活を始めた当初、その目は海外の探偵小説に向いていた。それは大正13年(1924)12月29日付の小酒井不木宛の手紙からも窺い知ることが出来る。

私は昔の裁判物語など一つも読んで居りませんが、以前から、明智光秀、原田甲斐、由井正雪、天一坊、村井長庵、など理智的な悪人に魅力を感じてゐます。

(浜田雄介編『子不語の夢』皓星社 2004年)

「昔の裁判物語など一つも読んで居」なかった乱歩が近世の裁判小説に関心を示しその収集を始めるきっかけを与えたのが、この手紙を宛てた小酒井不木であった。

先の手紙は『新青年』大正14年(1925)1月新春増刊号に記された不木の随筆「歴史的探偵小説の興味」と「世界裁判奇談」に対する乱歩の感想である。両者のうち、特に「世界裁判奇談」には『棠陰比事』や『棠陰比事物語』、『桜陰比事』、『鎌倉比事』、『桃蔭比事』などの資料が列挙され、それらの相互関係について、不木の解説が記されている。

現在、名古屋の蓬左文庫に小酒井不木文庫として収められている旧蔵書には様々なジャンルの近世資料を見ることが出来る。医学者であり、作家でもあった不木の近世資料収集については、書簡や随筆などによって知ることが出来る。「小生はかねて徳川時代の戯作者及び浮世絵師の筆蹟を集め居り候為誠に欣幸の至に候ひし次第に候。」(『小酒井不木全集』第12巻 昭和5年(1939) 改造社)という昭和4年(1929)の不木の書簡や、にも、「同氏の随筆物に、ちよい／＼現れてゐるやうであるが、同氏は、中々あれで江戸文学や浮世絵(主に絵本だつたと思ふ)にも蒐集欲が多かつた。……氏の好かれて買はれたものに、尚ほ黄表紙と絵本があつた。……西鶴物も相当に、原本や複製本によつて親炙してゐられたらしい。」(「小酒井氏と江戸文学」『新青年』第7号 博文館 昭和4年(1929))と、尾崎久弥の随筆不木が近世資料の収集に力を入れていたことが記されている。『名古屋市蓬左文庫古文書古繪圖目録』(名古屋市蓬左文庫編集 名古屋市教育委員会発行 昭和51年(1976))の「附三 小酒井不木文庫本」の項を見てみると、乱歩に近世資料への興味を与えた不木の随筆「世界裁判奇談」に用いられていた『棠陰比事』や『棠陰比事物語』、『本朝桜陰比事』、『鎌倉比事』、『本朝桃陰比事』などは、実際に不木が所有していたものであり、不木の随筆は具体的な参考資料を基に記されたものであったことがわかる。乱歩が不木の随筆を通して近世資料に興味を抱いたのは、そこに誰にでも納得出来るデータが含まれていたからではないだろうか。

大正13年の時点では、ほとんど近世資料に関心がなかった乱歩であったが、それから25年後の昭和25年(1950)になると、近世の裁判小説を列挙した随筆を書き始める。

研究成果の概要 つづき

……日本には探偵小説がなかったのかというと、必ずしもそうではない。徳川時代には中国の「棠陰比事」の系統を引く西鶴の「桜陰比事」その他、「智囊」の翻案である辻原元甫の「智恵鑑」、「杜騙新書」などの系統の団水の「昼夜用心記」その他があり、作者不明の板倉政談、大岡政談など、機智による謎解き小説というものはかなり広く行われていた。

(「日本探偵小説の系譜」『乱歩随筆』、初出『中央公論』昭和25年〈1950〉)

ここに挙げられた資料名は大正14年に発表された不木の「世界裁判奇談」に既に挙げられていたものであり、またそれらがどのような系統にあるか示すという随筆の内容も不木もものとそっくりである。乱歩は翌年昭和26年〈1951〉9月にも似たような内容の随筆「原始法医学書と探偵小説」(『乱歩随筆』、初出『自警』)を発表している。また乱歩は先の不木の随筆に挙げられた資料をすべて所有しており、いかに乱歩が不木の随筆に影響を受けたかが見て取れる。

近世の裁判小説以外に乱歩の旧蔵書で特筆すべきものは男色関係資料の多さであろう。乱歩は早くから男色に関心をもっていたようだが、関連する文献を収集し始めたきっかけは、『男色文献書志』(昭和48年〈1973〉年 岩田貞雄発行)を記した岩田準一であったようだ。岩田とは、男色研究を軸として交流していたことが、『同性愛文学史一岩田準一君の思い出』(『乱歩随筆』、初出『人間探求』昭和27年〈1952〉5月)に記されている。その中に「昭和二、三年頃から、両人の同性愛文献あさがはじまった」という一文を見ることができる。「昭和二、三年頃」から始まった乱歩の男色研究は、男色関係資料の収集と「読書カード」の蓄積という形で構成されていた。しかし、昭和18年〈1943〉、乱歩は集めていた「カードの全部を岩田君に提供」し、岩田に男色研究の結実を託す。このことは翌年に記された『男色文献書志』の序文にも「平井太郎殿は、この編纂に当って編者の脱する読書カード三百余枚と、数多の参考書を貸与せられた」と記されており、本文中では、乱歩の本名「(平井氏)」として、その情報が載せられている。また、『男色文献書志』は日本の資料に限定されていたが、渡辺憲司「江戸川乱歩と男色物の世界」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂 平成15年〈2004〉)には乱歩が「家蔵同性愛関係書」として西洋や印度、中国など、広く世界の関係資料を集め、記録していたことが記されている。日本だけに留まらず、各国の文献を探り、まとめていたことや、作品のどの部分それに該当するのか、逐一注が付けられている『男色文献書志』などを見ても、乱歩が男色文献に非常に関心を示していたことがわかる。

後年多くの近世資料を乱歩が所有した背景には、不木や岩田のような人物と出会い、彼らに触発されたことが一つの大きな動機として考えられるだろう。